

研成義塾の人びと

宮 沢 正 典

—

幕末開国とともにキリスト教は伝えられたが、それはまだ農村地域ではほとんど無縁のものであった。開港場から僻遠で、また、明治にはいつて熱心な廃仏毀釈をおこなった信州南安曇地方の場合も、その例外ではない。しかし、現在穂高町を構成している地域は、一切の新思想とかかわりがなかったわけではない。むしろ、明治初年には松沢求策を自由民権運動に投じさせ、その運動の拠点となった松本の奨匠社創立に参画したのも多く、ちなみに、東穂高村の奨匠社員は二四名をかぞえる。¹しかし、キリスト教については明治二〇年代にはいるころまで、まったくの処女地であった。隣接する豊科町には、安曇美以教会の母胎となる信安教会が一八八四（明治一七）年に設立されており、穂高との接触は絶無というわけではなかったけれども、その影響は直接的にはおよんでいない。

穂高に、キリスト教がもたらされたのは専門の教職者によってではなかった。それとはちがうルートからであった。いわばキリスト教青年運動として扶植されたのであり、ここにとりあげようとするキリスト教主義の私塾研成義塾は、まさにそうした運動のうみおとしたものであった。

研成義塾の創立は一八九八（明治三二）年十一月七日であるが、これと不即不離の關係をもつ東穂高禁酒会が発足したのは、七年先行する一八九一（明治三四）年二月二〇日であった。よかれ悪しかれ、それらはこの保守的な農村地域にキリスト教をもちこむひとつの糸口となったものである。

この東穂高禁酒会と研成義塾という二つの小さな団体は、共同体からは一種疎外された位置におかれながら、プロテスタンティズムのもつたかい理想主義をかたくなにまもった。したがって、その歩みはちちとしたものであり、礎石をおいてからも大方の賛同をかちうるといふものではけっしてなかった。しかし、そのことによってかえって運動は純化され、青少年らに大きな影響をあたえ、すぐれた成果をかちえたのではなかったのか。

従来、この団体やメンバーについては、当事者たちによるいくばくの書き残こされたものがある。オリジナルなものには東穂高禁酒会會員名簿、同会記録、研成義塾設立趣意書、同義塾入学願書綴、井口喜源治の聖書講義ノート、日記および書簡^{（2）}、それに荻原守衛（礪山）の日記および書簡などである。ガリ版刷りの機関誌『研成』『天籟』『故山新報』などもこれに加えていい。また、渡米グループによる『新故郷』も残こされている。しかし、その存在を最初に周知させようとしたのは内村鑑三だったとみられる。以下にそれらのおもなものを発表順に整理しておく。

内村鑑三「入信日記」（一九〇一年一〇月『万朝報』。『内村鑑三信仰著作全集 17』教文館刊に所収）

内村鑑三「入信の記」（一九〇一年一〇月『無教会』。同右に所収）

斎藤茂「研成義塾と井口先生」（一九二二年一月『信濃教育』。斎藤茂『わが日わが道・後篇』山上社刊に所収）

内村鑑三「回顧三十年」（一九二九年三月『聖書之研究』。『内村鑑三信仰著作全集 19』に所収）

相馬愛蔵『一商人として』（一九三八年七月、岩波書店刊）

清沢洌「無名の大教育家」（一九三九年七月『雄弁』。斎藤茂編『井口喜源治』研成義塾教友会刊に所収）

相馬黒光『穂高高原』（一九四四年三月、女性時代社刊）

斎藤茂編『井口喜源治』（一九五三年七月、前掲）

柳沢広「喜源治と礫山」（一九五八年六月『信濃教育』）

山田貞光「東穂高禁酒会の成立と芸妓設置反対運動」（一九六四年二月『木下尚江研究』）

須沢績「井口喜源治先生」（一九六七年二月 穂高高校生徒会編『穂高』）

仁科惇『礫山荻原守衛』（一九六七年二月、柳沢書苑刊）

太田愛人「信州穂高研成義塾」（一九六八年四月―八月『日曜学校』）

務台理作「一人で七学年を教えた先生―井口喜源治氏のこと―」（一九六八年）

宮沢正典「研成義塾のこと」（一九六九年九月『同志社時報』）

なお、禁酒会につどった個性的な人物は文学作品のなかでもとりあげられている。⁽⁴⁾

さて、本稿では、研成義塾の沿革を通してその性格を明らかにし、義塾の生み出した人びとに目をむけたい。とりわけ、前記の文献中ではほとんどとりあげられることのなかった渡米者たちの団体北米合衆国シアトル穂高倶楽部の人びとに焦点を絞ってみる。彼らはもっともよく義塾の精神を背骨として活動したと考えられる人びとのグループであり、また、たんなる功名心を卑しめ、勤勉誠実だが平凡な市井人を願った師井口喜源治の弟子にふさわしい生き方をした群像だと考えるからである。

- (1) 松沢求策は東穂高村出身。市川量造らと契匠社を結成。一八八〇年五月「信濃国人民二一、五三五名の総代として」国会開設請願のため上京している。契匠社員中には研成義塾創立に助力をおしなかつた臼井喜代の名もみえる。中島博昭「続松沢求策論（二）」（『信濃』一九六六年九月号）参照。

- (2) 日記は井口家蔵。そのほかは横内三直氏蔵。しかし、井口喜源治記念館（一九六九年二月開館）に移管されるときく。

(3) 仁科傳『礫山萩原守衛』(一九六七年、柳沢書苑刊)の書簡一覧表、参考資料参照。

(4) 木下尚江『靈か肉か』(一九〇七年刊)、臼井吉見『安曇野』(一九六五年刊)。

二

東穂高禁酒会は当初はキリスト教をにかけていない。わざわざ「本会は決して宗教及び政治に関係せず」(同会申合規約第八条)とことわっている。これは設立の中心となった相馬愛蔵、望月直弥、望月幸一(小学校教師)や、キリスト教に関係をもたなかった望月五三、望月喜恵作、岡村国忠、林盛次、水口為一、望月八十八、氣賀沢玉童、丸山文一ら一名の青年たちの体質をあらわしていると考えられる。

たしかに、相馬は東京専門学校在学中から牛込市ケ谷の牛込教会に出入りして、「学校よりも教会」からもっと大きい影響をうけていたという。⁽¹⁾この教会を媒介として、宮崎湖処子、金子馬治、野々村戒三、矢島楫子、大関和子、三谷民子らと相識り、また、押川方義、植村正久、内村鑑三、松村介石、本田庸一、小崎弘道、服部綾雄、島田三郎、巖本善治、津田仙、山室軍平らの教えをうけている。さらに、一八九〇(明治二三)年に卒業して約一年間過ごした札幌でも、教会を通して藤村信吉、頼子夫妻や伊藤一隆らと親しく接していた。⁽²⁾しかし、これほど濃厚なキリスト教界との接触にもかかわらず、結局相馬が受けとめたキリスト教は、かれによれば、「一つの精神運動として、それが文化的の面には大いに感化せられるが、自ら宗教的感激に身を入れるといふうまねつきではなかった」⁽³⁾ために、キリスト教との関係はかれにとって青年期の一過的な性格をまねがれるものではなかった。

穂高の青年の知的な分子をひきつけたのは、むしろ、キリスト教をひとつの新知識とみていた点にあった。「宗教に関係

第 一 表

年度	入会者	年度	入会者	年度	入会者
1891	11	1901	3	1911	9
1892	11	1902	6	1912	10
1893	1	1903	8	1913	14
1894	5	1904	0	1914	14
1895	18	1905	24	1915	11
1896	15	1906	5	1916	9
1897	4	1907	6	1917	8
※1898	33	1908	6	1918	16
1899	8	1909	9	1919	0
1900	7	1910	5	1920	4

※ 研成義塾創立

※※ 相馬愛蔵離村

第 二 表

死	亡	11
退	会	48
除	名	129
移	北 米	15
	南 洋	4
住	北海道	1

せす」という綱領をかけることは、禁酒主義とキリスト教という二重の異端的性格からもたらされる困難を回避することであり、かえって、禁酒会成立の必要条件だったともいえる。相馬らがそれを意図していたか否かは別として、青年たちの欲求を巧みにオルガナイズするのに役立ったのである。第一義はやはり禁酒であり、「且品行を慎み職業に勉強し節儉を行ひ他人の為を計ること」（同会申合規約第一条）であった。したがって、禁酒会の例会は「禁酒主義を拡むるため」（同第四条）の学習会であるとともに、狭義の禁酒主義の枠をこえた多様なテーマをもっていた。むしろ、広く知識を求めようとする青年たちにとって一種の研究サークルであり、たかい文化的かおりをもつものであった。そして、例会だけでは足りず一八九六（明治一九）年には、禁酒会の事業として夜学をはじめている。井口喜源治、望月直弥、相馬愛蔵らが担当して日本外史、論語、英語、珠算などが講じられた。県立松本中学校の同窓である木下尚江もここに来援している。外にむけては、禁酒演説会、幻灯会の開催あるいは戦没者弔慰、三陸津浪義捐などもおこなって村の廓清に新風をおくった。

ここで会員名簿をもとに、一八九一（明治二四）年から一九二〇（大正九）年までの入会者数を年次別に示めすと次表のようになり、総計二八〇名である。

もつとも、会員数がそのまま累積されていったわけではない。退会者や除名されたものが多く、その時期は名簿だけでは確認できないが、上記の期間を通してみると、移動は第二表のとおりはげしい。抹消されないで名簿に残存したものは、二八〇名中七十二名のみである。除名は規約（第二条）によって終始厳格におこなわれた。退会の原因は、たとえば、一八九七（明治三〇）年十一月二日脱会届を提出した荻原穂一（守衛の兄、一八九五年入会）の場合、「養子となつて望月家に入るに就いて、禁酒主義の守り難き」による。禁酒主義を第一義にかかげた団体であるとすれば、大量の除名も、右にみる種類の退会もある程度やむをえない。

前後するが、井口喜源治の入会したのは一八九三（明治二六）年二月二〇日、荻原守衛の入会が翌年十一月二八日である。やがて禁酒会は井口と不可分のものとなる。かれの影響下に入会するものもとても多い。研成義塾創立後は年をおつて義塾出身会員が増加している。主なメンバーをあげると、一八九九年には西沢永一、西沢静雄、水口象雄、一九〇二年に望月融、望月滋治、一九〇三年には渡米グループの東条麟、平林破魔雄、清沢冽、平林利治、片瀬与一ら、一九〇五年には望月積善、斎藤茂、西沢今朝勝、一九〇六年に久保田栄吉、平林義行らがあり、以後も禁酒会と研成義塾とは不即不離の關係をもつ。清沢己未衛の入会も井口と無關係ではない。

さて、相馬愛蔵が上京のため離村したのは一九〇一（明治三四）年九月であるが、禁酒会発足時の一名は、それ以前すでに退会四、除名二、死亡一、遠隔のもの一をかぞえている。残るのは望月直弥と丸山文一だけであり、当初の規約からはなれて、じつは本来もっていたキリスト教運動的性格を強めていったとみられる。相馬の離村と時を同じくして、内村鑑三が来村して九月二日から三日間講演しているのは象徴的だ。対象は研成義塾でもあったが、同時に禁酒会でもあった。こうして、禁酒会記録に「祈禱を捧ぐ」と最初に記されたのは一九〇五（明治三八）年二月二日のことである。

相馬黒光はこの点について、「愛蔵は、基督教の生活浄化の方面だけをとりあげて禁酒会を創立し、宗教的に強ふるとこ

ろは何もなかったが、年経るまゝに会の中心が頑固な基督教信奉に偏し、大いに殉教の美を発揮すると共に遂に衰亡の運命をまぬがれなかったのも一つの注目すべき現象である」と記している。これは井口喜源治を意識において述べたものである。しかし、禁酒を破るものを除名していくことは、たんに酒を禁ずるだけの偏屈が目的というのではなくて、禁酒によって成立する倫理の問題なのである。彼らを包含しておけば、禁酒会の成立条件をおびやかされる。その意味で会の盛衰には相馬愛蔵といえども無関係ではない。たしかに、明治期におけるキリスト教は、一部において、宗教としてよりも思想的新鮮さにおいて憧憬的に接受された傾向はある。しかし、その種の新思想はいつかまた旧思想になりうる。黒光自身「間もなく基督教を脱してしまつた」のはどんな理由によるのだろうか。

禁酒会がそれ以後も入会者の規模を、じつは当初と大差なくとも、新鮮さは失いつつもその存在理由をもちえたのは、黒光の見解とは逆に、「年経るまゝに」キリスト者の団体へと変革することができたからであつたとわたくしは考える。

- (1) 相馬愛蔵、前掲書、六ページ、二〇三ページ。
- (2) 同書、二〇四―五ページ。
- (3) 相馬愛蔵「穂高の聖者」(斎藤茂編『井口喜源治』一三二ページ)。
- (4) 一八九二年一月一〇日「禁酒主義の妨害」(『日本禁酒会雑誌』一八九二年一月二〇日、松本通信)、一八九六年二月三十一、三二日「平重盛」(東穂高禁酒会記録)。
- (5) 内村鑑三、前掲「入信日記」「入信の記」および「信州東穂高講談会講演大意」(一九〇一年二月『聖書之研究』、前掲『内村鑑三信仰者作全集 22』に所収)を参照。
- (6) 相馬黒光、前掲書、一三二ページ。
- (7) 同書、一三三ページ。

研成義塾が東穂高村矢原の集会所をかりて発足にこぎつけたのは一八九八年一月七日である。正式に設立が県知事から認められたのは、二年半後の一九〇一年四月二〇日である。そして、設立者であり、終始ほとんど唯一の教師であった井口喜源治が脳溢血で倒れる一九三二（昭和七）年一〇月まで三四年間維持された。形式上は、井口の病没直前の一九三八（昭和一三）年三月二九日廃校認可までである。これにさきだつ、一九三四年九月二〇日、塾舎を取り壊している。ここに集つて最後の祈禱会をもつた門下は水口象雄、白居佐登美、横内三直、平林義行、西沢本衛、小沢寿作、丸山治であった。いまここには塾跡の碑（矢内原忠雄筆）をのこして田圃となっている。

さて、研成義塾の創立は、当時四力村組合立の東穂高村小学校教師であった井口がここを追われたことから始まる。

井口のここにいたるまでの略歴と思想形成について一瞥しておく。かれは一八七〇（明治三）年五月二日、同村で喜十の長男として出生。高遠藩士白山高橋啓十郎が校長であつた研成学校に学んだ。学制施行後まもなくのことである。研成義塾の名は母校にちなんだものである。松本中学へは、相馬とともに東穂高村からの最初の入学生であつた。一八八九（明治二二）年三月卒業すると、明治法律学校に進学するために上京した。松本中学を中退して、さきに上京していた相馬の誘掖によつて、かれも牛込教会に出席していた。そこで相馬が交渉をもつたとほぼ同じ人物らに接していたはずである。東京での修学期間は二年間であつた。帰郷すると、東穂高村小学校の教師となつた。一度上高井郡小布施村小学校に転じたが、一八九八年ふたたび東穂高村で教鞭をとることになった。さきに触れたように、禁酒会に入会するのは在職中の一八九三年一二月で

ある。この前後短期間で急速にキリスト教信仰に近かづいている。元来、井口には儒教的、精神主義的姿勢がうかがえるのであるが、この会のもつ禁欲的プロテスタンティズムの傾向は、井口をそれと結合させて実践的な活力を与えた。

さて、井口がなぜ小学校を追われるにいたったかについては次の二点が考えられる。

第一には、井口のキリスト教主義による人格主義の教育が生徒の心をとらえたであろうこと、また、キリスト教や禁酒主義はかれに心酔する生徒を介して父兄批判にもつながったと考えられる。⁽¹⁾ 彼らが学校の内外に反対派をうむことになる。こうした伏線を背景にして紛糾したことが第二の原因である。当時、穂高に芸妓置屋を誘致しようという有力者たちの運動が続いていた。井口によれば、「禁酒会は之れに反対の運動をなし其極私共は其復讐として学校より追ひ出さるゝことゝな」⁽²⁾った。私共というのは井口と望月直弥である。禁酒会員や相馬安兵衛、臼井喜代らの引留運動にもかかわらず結局井口は豊科小学校に転任を命じられてことは一応落着いたかにみえた。しかし、反対派の追咎は執拗をきわめた。ふたたび井口によれば、「同じ学校に居た職員の一人で不断私共を基督教信者と目して居た忠君愛国論者の一人は私の転任さきの学校へ行つて其職員を煽動し彼れ若し来らば吾等は同盟して学校を去るべし彼と共に教鞭を執らざるべしと約束するに至り私にして若し赴任せばそこにも一大騒動は起り来るべき有様であつたから私は到底教育社会に入れざるを思ふて断然辞職」⁽³⁾するにいたつた。二八歳のときであつた。

これと平行して、穂高小学校から独立した私塾をつくつて、井口に理想の教育をおこなわせようとの策が、禁酒会の青年たち、とりわけ相馬愛蔵、望月直弥、荻原守衛らによって練られた。こうしてついに井口は決意を固めた。

青年たちの私塾設立の趣意は相馬安兵衛、臼井喜代の支援によって具体化した。設立の経済的基礎について愛蔵は次のように記している。「その経営はどうするのか、建物は、敷地は、井口先生の生活費は、この問題に進んで協力できるものは殆どないといふ有様であつた」⁽³⁾。そこで、とりあえず相馬、臼井らのとりはからいなどによって、矢原の集会所を仮教室と

して一八九八年十一月七日開校にこぎつけた。最初の塾生は一二名にすぎない⁽⁴⁾。矢原、白金、等々方の三耕地の、井口を支持する父兄がその子弟を退学させて穂高小学校からここに移したものであった。生徒数は漸増して、翌年三月の卒業記念写真を見ると、男子二〇名、女子二名である。しかし、発足まもない研成義塾にたいする反対派の動きはなおも執拗で、一九〇〇（明治三三）年四月の新学期には、約半数の生徒が脱塾していった⁽⁵⁾。

また、借屋住居のために、授業は村の集会を避けねばならない。時間の不足は井口の自宅での夜学でおぎなわなければならなかった⁽⁶⁾。さらに、私立学校令公布（一八九九年八月二日）によって、研成義塾が同令に抵触するかも知れないという疑懼もあった。だから、専用塾舎の建設は義塾の基礎の確立と将来の発展に不可欠だと考えられた。愛蔵の記すところによれば、「非常な奮発で、禁酒会員中の熱心な者四五名が、敷地三百坪の地代と粗五俵を出すことを申合せた。兄安兵衛が教室をつくるために五百円を出してくれた。……無論井口氏の教育に共鳴し、義塾の発兌に祝意を寄せてのことであつたには違ひないが、私としては兄が、新思想を鼓吹して井口氏をかういふことに立到らしめた私のために善処してくれたといふ感謝の方が、幾層倍にも強かった⁽³⁾」。これに、安兵衛とならぶ素封家臼井喜代は設計その他の経費を寄せて、一九〇〇年一〇月着工した。「材料の運搬、地均胴突、工人の手番手伝一切を生徒が夜を日に継いで働⁽⁷⁾き、翌年一月一日、三枚橋の新塾舎に移転した。このときの塾生は二十七名、祝賀会には禁酒会員二一名が列席した。

この年は、義塾にとって飛躍の年だった。四月には正式認可を得てはじめて一般に生徒募集を訴えた。それが「研成義塾設立趣意書」である。

多数の同志者の熱愛によりて研成義塾成れり。抑も吾塾は如何なる目的を以て生れたるか、曰く文明風村塾的真教育を施さんが為めなり。蓋し官公立学校には官公立学校の特色あり、村塾には村塾の異彩あり。吾人方今の教育界に於る光景を察してかゝる村塾的教育の貢献少なからざるべきを確信す。

こういう前文に続けて、六カ条の企図するところをにかけている。要約すれば、学生は将来「各天職を尽すべきもの」であり、そのためとくに、「宗教觀念の根底的精華を發育せんこと」および「仔細に学生の性情を察し各適応なる活ける教導を与へ、其一生の方向に最も有効なる進歩の慣習を与へること」を通して、彼らに「自ら發明する所あらしめ」ようと期した。また、「教師は学生を子女の如く愛し、学生は互に同胞の如く和し、苦楽を分つ風儀の間に品性の修練を成就せんと勉むるものなれば、吾塾は学生の多数を望まず、校舎の壮大なるを希はず、教師の教化薰育は学生の少なければ少なき程行届くものなれば、多くして粗ならんより少なくて精ならんことを欲し、外見の盛大ならんよりは充実せんことを期す」と義塾の性格を規定している。

これらの綱領は井口を通して、よくはたされたというべきである。ただ、第四項の「吾塾は宗派の如何に干渉せず」、「されば吾塾に於ては神儒仏邪何れの宗教を信ずとも学生の自由に一任し、決して一定の宗教を強ふるが如きことをなさず」（傍点は宮沢）は、事実と違反する。かりにキリスト教を強いることはなかったとしても、それをとり除いた井口も研成義塾もなかったはずだからである。

このころから、『東京独立雑誌』つづいて『聖書之研究』によってかれの信仰は養われた。「午前四時床にありて俄然として自得し自ら三十年來の非を覚り此に自然の大法に意志あるを感じ自ら『新たなる生涯に入りしことを知る希はくは此清き心をして永遠に保たしめたまへ愛する神よアーメン起きて田の畔を歩す天地其景象を改め星光赫奕として神意を語るが如し』」（⁸）（一八九九年七月九日）と、みづから記したように、井口の宗教的回心をみることができるとくに、一九〇〇年以後、内村鑑三の講習会に列し、内村も三度にわたって來穗（一九〇一年、一九〇三年、一九一〇年）講演をおこない、両者の肝胆相照す關係が築かれていく。多くの点で見出される井口の内村との共通性は、内村からの影響であると同時に、両者が共鳴しうる氣質が井口にそれ以前に内在していたように思える。時期はズれるが、一九二〇（大正九）年十一月二五日朝みづからバプテ

スマを授けているのも特異である。当日次のように記している。「父と子と聖霊の名によりて汝にバプテスマを授く願はくは従来のすべての罪をゆるし神の国に新たに生るものとならしめ給へ神の国に其名をしるさしめ給へ残れる生涯を神の爲人の爲に用ふることを得せしめ給へ汝の手汝の足すべて神の栄光の爲めに用ふることを得しめたまへ悪魔の誘惑に敗るゝこと勿れアーメン」と。⁽⁹⁾

さて、研成義塾の修学課程については、「和洋漢の三者を適宜に按配し」、「旧えに於ける武士道の朴直儉素貞淑の風」および「日進の時勢に鑑みて自由快活勇進の風」を養うことを「趣意書」にかかげている。これらを柱に旧制中学校初級程度を三カ年に履修させる普通課程に漸次定着していった。テキストは、初期の塾生斎藤茂によると、⁽¹⁰⁾『論語』『孟子』『十八史略』を基幹として、前二書は「倫理なる名の下に儒教の精神を、『十八史略』は漢文と歴史に当」てた。初期の義塾には明治天皇の御真影だけがかかげてあり、一切のキリスト教的表象を用いておらず、塾生はキリスト教以前に中国の古典に親しんだ。彼らの文章にはその影響がうかがえる。英語はとくに週六時間をあてた。「ナショナルリーダー」で、神田乃武の英文法を用いつつ普通四の巻まで、力があれば五の巻まで進めた。幾何に菊池大麓、代数に藤沢利喜太郎を用いた。キリスト教教育は、当初朝礼および食前の祈祷、讚美歌のほか課外で週末一時間「お話時間」がおかれて、新旧約にわたり物語風に語られていた。のちには、週二時間の道話が正課とされた。草創時代生徒が小学生だったころには、『里見八犬伝』『巖窟王』『噫無情』『イワンの馬鹿』その他が語られ、それが効果的であったという。塾生の誰れもが、アルプスをのぞむ大自然のなかで、「……春になると、よく聖書と讚美歌とを持って万水という水足ののろい川の辺に行つて、若草の上に腰をかけて、井口先生の話しを聞いた……」⁽¹¹⁾と詩的な世界を回想する。それに、井口の信仰によって来塾した内村鑑三、山室軍平、畔上賢造、斎藤宗次郎、木村孝三郎、江渡狄嶺、海保竹松、浅野猶三郎、塚本虎二、手塚縫藏その他の人びとの講演は、塾生たちに深い感銘をあたえ、のちまでも彼らの血肉となっていた。⁽¹²⁾教科をこえた義塾の特色といえよう。なお、井

口は岩本善治、松村介石、柳敬助、中村不折、山本安曇、山岸王五、秋田雨雀、森本慶三、中田信蔵、小山英助らとも交渉をもっていた。

ここで塾生数を検討しておきたい。

研成義塾の出身者総数は、一般に六〇〇余名とされている。年度毎の在籍数は大略三〇名と記しているのが普通である。しかし、一九〇六（明治三九）年から一九三一（昭和七）年までの「入学願書綴込」が残されているが、その合計だけでも第三表のように六〇五名となる。

第三表

1906	1	但し12月のみ
1907	25	
1908	15	
1909	9	
1910	23	南部農学校
1911	39	
1912	33	
1913	20	
1914	30	北部農学校
1915	26	
1916	39	
1917	36	
1918	29	県立南安曇農
1919	30	
1920	23	
1921	36	
1922	25	県立豊科高女
1923	22	
1924	22	
1925	25	
1926	17	
1927	16	
1928	20	
1929	10	
1930	10	
1931	19	
1932	5	

青柳さく子

この綴りに含まれていない創立以来八年間の入学者数を年平均二五名とすれば、総計は八〇〇余となる。もちろん厳密な意味の三カ年修了の卒業生に限定すれば、その数ははるかに下まわるものと考えられる。たとえば、一九一五（大正四）年三月二七日証書授与式では、卒業四、修学二年七、同一年一七、計二八名であり、その他出席八カ月未満五、中途退学二で、

在籍合計は三五名であったと記録されている。⁽¹³⁾ 第三表によれば、一九一〇年から一九二二年が一応安定期とみられる。この間、梓村に南安曇南部農学校が、穂高町に北部農学校（ともに修業年限三年の乙種実業学校）が、さらに、豊科町には県立南安曇農学校（甲種）および県立豊科高等女学校がそれぞれ設置されているが、それらが研成義塾に直接打撃を与えた形跡はない。しかし、家政裁縫教師青柳さく子の急逝は、このあいだの在籍者に裁縫科の女生徒が多かった（裁縫科第一回卒業生一七名）だけに痛手となっている。また、志望者の質的変化があったとみられる。井口は後任を求めたが人をえなかった。⁽¹⁴⁾ こうして、卒業後の資格などの法的な特典をもたない私塾への一般からの志願者は激減していった。井口はもちろん塾生や卒業生も、知人などを頼って入学の勧誘につとめたが、その効果はうすかった。⁽¹⁵⁾ これは「村民の実生活と塾の教育の不一致性を示めすものであ⁽¹⁶⁾」るとはいえる。しかし、そのことを消極的にのみ評価するのは誤りだろう。そのことによって塾としての特性を発揮できたことも無視できない。

このため、相馬らの支援によって発足したものの、以後は上記の在籍者の月謝に頼らざるをえず経営は窮する。一九一九（大正八）年には、愛蔵（東京新宿中村屋）へ経営の概略を、「負債凡二千五百円援業料二十四五円、一ヶ月の経費五十円一年の不足約三百円負債の利息二百円特別寄附百円一ヶ年四百円欠損のごとき経営により土地を手放すこと連年なり家人為に窮乏を嘆く」と、報告している。⁽¹⁷⁾ 井口はかれの思想、教育方針にたいする同情によらぬ寄付は一切謝絶する心境を固くもち続けた。こうした清教徒的極貧が井口の一徹さをよくしめしているといえる。しかし、まだ若く貧しい門弟たちの、不定期でわずかな献金を非常に喜んで受けたという。「町の足袋商で篤い信仰と敬虔な心を持つ青年で、町の一部の若い層に開拓者としても仰がれている」一人は毎月一〇円の献金を欠かさず、また、電灯会社の集金人となっている弟子は井口の家で電灯（義塾は無灯）を負担した。⁽¹⁸⁾ これだけが例外的な定期の援助だった。『天頼』『故山新報』『新故郷』の会員らは機会ある毎に募金している。こうした名もなき神の民をうみ、彼らの祈りによって支えられたのが研成義塾であった。前途を心配

する塾生にたいして、苦難のなかにあっても井口は「十人が一人でも授業は続けるから安心して勉強してくれ」といい、塾生は「師弟慰め合ったやうな気がして勇気が盛り上がったことを覚えている」ような「苦楽をともしする」⁽¹⁹⁾「雰囲気をつくりだしていた」。

- (1) 井口自身はこのことを語っていないが、早くから人格教育の必要を痛感していた（斎藤茂『わが日わが道・後篇』八〇、八三、八五―八六ページ、相馬愛蔵「穂高の聖者」一三二ページを参照）。相馬、斎藤両氏とも井口とあまりにも親しい関係だが、身内の論ではなく、以下にみる多くの塾生との関係からも充分うかがいうる。

- (2) 斎藤茂編『井口喜源治』五一ページ。これは一九〇七年八月千葉県鳴浜村の海保竹松方でおこなわれた夏期懇話会における井口の信仰経歴中の敘述である。

- (3) 相馬愛蔵「穂高の聖者」一三三―一三四ページ。

- (4) 『わが日わが道・後篇』八五ページ。なお相馬は三〇名としているが、その後の増加をも加えたラウンドナンバーズであらう。

- (5) 仁科惇、前掲書、六六―六八ページ。

- (6) 『わが日わが道・後篇』八六―八七ページ。頻繁な集会は反対派の画策でもあった。なお、夜学は後年まで農閑期におこなわれた。

- (7) 同書、八八ページ。

- (8) 『井口喜源治』二ページ。

- (9) 同書、四ページ。

- (10) 『わが日わが道・後篇』九四ページ。

- (11) 清沢冽「無名の大教育家」（『井口喜源治』一六二ページ）。

- (12) 清沢冽は、「山室平氏の説教を開いたのもこの校舎に於てであった。僕等はその熱弁に感涙が出て、どうにも止められなかった。爾来、僕は一貫して山室氏の支持者であり、その人格を嘗て疑ったことはない」（同書、一六二ページ）とのべている。類似の感銘について多くの塾生が記

している。たとえば、平林利治（同書、一八二ページ）、東条勝氏（東条勝『私の春秋—東条勝目録伝—』一九六六年、東条勝伝上梓の会刊、二五ページ）など参照。

(13) 『故山新報』（故山新報社）第一五号、一九一五年四月一日。

(14) 卒業生須沢芳美宛書簡（一九二二年四月二日付、須沢績氏蔵）。田中ふじゐ「形見の肖像」（『井口喜源治』二〇〇ページ）など。後任の宮沢ふさ子はごく短期間であった。

(15) 『井口喜源治』二三三、二六〇ページ。『天籟』には塾生による素朴な広告がみえる。また、斎藤茂氏への書簡中に「……新学期用意別紙の通り決定仕り候間御近辺に志望者も有之候はば精々御勧誘を下度願上申候成績宜しきものは尋常卒業生にても本科一年へ編入仕り候間御承知下度候……」とある。

(16) 相馬愛蔵「徳高の聖者」一三四ページ。なお、栗林柳太郎氏は大正末期の塾生だったが、入学の勧誘につとめて「アーメンはゴーメン」というに出あったという（「盆栽と弟子を愛する先生」、『井口喜源治』二三三ページ）。

(17) 『井口喜源治』四ページ。妻きくのは七男三女をかかえて農耕と養蚕に追われていた。

(18) 『わが日わが道・後篇』九一—九二ページ。おそらく前者は横内三直氏、後者は白居佐登美氏であろう。

(19) 栗林柳太郎「盆栽と弟子を愛する先生」二三三ページ。

四

研成義塾の周辺には、井口を中心とする、より濃厚な宗教活動があった。

日曜集会は、はじめ井口の自宅で夜ひらかれていた。ここでは井口の聖書講義、讃美歌、祈祷がおこなわれ、塾生を中心に十数名が出席した。東条麟（東京銀座ワシントン靴店主）はここで「キリスト教の善き僕たらんことを心に誓」った。⁽¹⁾ 東条らよ

りやのちの一九〇七（明治四〇）年ころの出席者には望月直弥、丸山文一郎、丸山定重、西沢本衛、武井文雄、原田幸自由、平林義行らがあった。この集会は一九一八（大正七）年八月から義塾にうつされ、日曜学校も加えられ二、三〇人が出席した。さらに、一九二五（大正一四）年二月からは、井口の自宅で毎水曜日の夜祈禱会がまもられるようになった。出席者は松岡弘（穂高小学校長、現信濃教育会長）、福与英治（有明小学校長）、飯島隼人（温明小学校）、荻原角衛（眞技術員）、横内三直、平林義行、井口和七郎（井口の七男）らが常連であった。日曜学校および祈禱会は、井口の没後も横内、平林らや松本から欠かさず来聴した手塚縫蔵らによって、戦時下と戦後まで受け継がれた。横内、平林らは井口のもとに求道者として私淑し、生涯の方向を決定している。わたくしはこの夏、同じように、井口の聖書研究会に出席した八〇余歳の老農夫が、愛読した内村、山室やブース夫妻の著書や『聖書之研究』『信仰の友』『角筈パンフレット』『ときのこと』などを持ち出して、井口を回想するのを見た。彼らは研成義塾に直接学ばなかったとしても、『研成義塾の人びと』にちがいない。手塚縫蔵も、まだ長野師範学校生徒であった一九〇二年一月、はじめて井口と接し塾風の清高なのに心をうたれて、「神よ、もし御旨なれば希くは吾をして井口先生の下にありて教鞭をとらしめよ」と祈っていた。

もっとも、塾生のすべてが、けっしてキリスト教を選びとって入塾したのではなかった。むしろ、多くのものが宗教教育に抵抗をしめしたし、井口を尊敬しながらも、「嘗て、忌み嫌った耶蘇教を先生が信ぜらるゝ事は誠に、玉に疵であると惜しんだ」りしている。

しかし、かえって彼らこそ井口によって信仰による生きざまを教えられた人びとだろう。平林利治（一九〇二年四月入塾）は後年その回心について次のようにのべている。「私は先生に接して始めて、人生の目的の何たるかを教へられた。やがて私にも天の光は、射し込むを覚へた。永い間、逡巡躊躇の末、私にも精神的方向転換の時期が来た。勿論、幾日か苦悶の日の打ち続いたことは事実であった。しかし、遂に悔い改めて新生に入る信仰生涯が始まった。天日は頭上に輝き、人生観は全

く変った。靈的誕生日を迎へたのである。其昔、人生志す所富貴功名にあり、名を後世、竹帛に残す男子の本懐之に過ぎずとの夢は破れた。思いきや、キリストの教は全く之と相反するを」。「嗚呼先生なかりせば、義塾に入学せざりしならば、到底、今日、自分のもつ感謝の生涯は得られなかつた事であらう」⁴。同じように、深い煩悶を経た少年清沢洌（一九〇二年入塾）は渡米にあたって、「神に近い生活をなし得る百姓になるか、それともキリスト教の伝導師になるか」の二者択一を固く決心していた。⁵キリスト教が単なる知識や思想としてではなく、純粹な福音として素朴に伝わりうるような若い学侶たちを、すでに生みだしていたのである。

編集人は井口となっているが、研成義塾を核とする有志によってつくられていた『天籟』（研成社）に、「世人の嘲笑を恐れて自己の所信を枉げんとする諸君に告ぐ」という檄をかかげた唐辛子はこう訴えている。「世人の嘲笑何ぞ恐るゝに足らん。余は諸君の勇氣なきを悲しみて止まざるなり。……而して諸君を嘲笑するものは如何なる人なるか。必ずや諸君が常に排斥して措ざる不道德者に過ぎざらん。果して然らば、若し諸君にして是等の輩の稱賛を被らば、そは諸君のため大なる耻辱なり、若し是に反して彼等の嘲笑を受けなば是れ諸君のために大なる名譽なり、何となれば是れ既に諸君が彼等と均しからざるを証明すればなり。然して世は是等の輩のみを以て満されず。真正なる宗教を奉じて善道を履むもの又少からず、故に縱令一方に於ては諸君を嘲笑するものありとも又他には諸君に満足なる慰撫を与ふるものあるべし、若し諸君が剛毅不撓にして自己の所信を枉げず真に神の教に従はゞ遂には諸君を嘲笑する多数の不道德者をも感化して幸なる清き神の子とならしむる事を得べし。云々」⁶と。こうした自負は、やがて平林義行の入門となる。かれは東条鱗、片瀬与一ら義塾出身者と接して、彼らが「皆真面目で一般青年とはかけはなれた良き氣風が見えるので自分もいつかは井口先生の教を受け信仰の生活に入りたいと云ふ考へを持つに至つた」⁷。井口が反対派となめらかな關係をつくりだしていたとしたら、おそらく、塾生たちここうした強烈なインプレッションを与えることはできなかったのではないだろうか。これは矛盾といえるし、井口や義

塾のある限界を示していたのではあるけれども、世俗の何ものにも拘束されない独立の教育機関をつくりあげていたのであった。⁽⁸⁾

そこでは、井口が望んだように、英才や偉人とはまさに反対の凡人たちを産みだした。彼らは「すべて自己の労働に勤勉で、誠実で、そして文明人として決して耻かしからぬ教養を身につけた平凡人」であり、いわば「無名の戦士⁽⁹⁾」であつたといえる。

(1) 東条鱗「常識の修養」（『井口喜源治』六五ページ）。

(2) 『手塚縫藏遺稿集』一九六七年、手塚縫藏遺稿集刊行会刊、三十四ページ。手塚は県下の小学校で教鞭をとり、松本教会の基礎をおいた。信州教育界と旧制松本高校に大きな影響を与えた。かれによつて受洗するにいたつたものはば二〇〇名という（久山康編『近代日本とキリスト教——大正・昭和篇——』一九五六年、創文社刊、一四九ページ）。

(3) 平林利治「井口先生を憶ふ」（『井口喜源治』一八〇ページ）。

(4) 同書、一八〇—一八一ページ。

(5) 清沢冽「無名の大教育家」（同書、一六〇ページ）。

(6) 『天籟』第二巻第一号、一九〇六年三月一日。発刊の辞をかかげた第一号は明治三十九年七月二八日発行であり、『研成』と合併した第二巻第一号（通巻第六号）が同年一月一日発行となつてゐるのは解せない。後者には「天籟に研成を合併する事」をのせているだけである。ともあれ、前者の発刊の辞によつて、この雑誌がいかなる人びとのものだったかを紹介しておく。「天籟とは何ぞや曉起霧を裂きて後山に上り雑木を刈りて馬背に縛し試に岩頭に嚙く時覚えず心奥に嚙くの声なり露を踏みて友と河辺の若草を席とし仰ひて夏も雪白き峻嶺を望み俯して明なる碧流に面し圀の爲め人の爲めに熱嚙を捧ぐる時揺かに胸裡に徹するの声なり満身汗を浴びて水田に雑草を探り或は園畝に鋤を揮ひ業終へて帰途に上れば月は鎌の如く晚鴉時に急ぐの時三つ二つ爛く星影を透して靈の耳にさゝやくの声也吾人は文学者に非ず経世家に非ず又更に英雄豪傑佳人才子にも非ず山間桃源の平凡なる労働者なり天命を案しんで職を勉むるに方り感得せる所の者を同好の愛友に告げんと欲するのみ豈又他あらんや以

て発刊の辞となす」と。しかし、その紐帯は宗教的のものであった。この点についてはのちにのべる。こうして、前後二年間に一八号をかぞえた。

井口は天籟生、敬愛生などの筆名で信仰、労働について語り、新体詩をのせている。

会員には西沢本衛、西沢永一、水口象雄、白居佐登美、清沢冽、西沢弥平、清沢庄市、斎藤茂、斎藤実、清沢明朋、西沢静雄、木藤貢、望月正治、下里萬峯、清沢浩、渡辺数術、東条橘、白居萬翠、望月秀一、相馬欽治、鵜飼捨吉、轟直正、林茂樹、平林利治、平林破魔雄、丸山定重、片瀬与一、海保竹松その他である。

(7) 平林義行「先生に跟いて四十年」(『井口喜源治』二五七ページ)。

(8) 井口の非妥協はいたるところにみられるが、平林義行は次のようなことを記している。

「仏式の葬儀をせらるる席でも先生は大担にキリストの教をもつて弔辞を述べられ両手を高く上げてキリストの復活を説き来世を語らるゝ様は今も目に付くようである。私も先生と同伴の時は役僧のように先生に付いて讃美歌を共に歌った事も二三回はあつた様に思ふ。」これらはあるのまゝの井口を示すものだろう(同書、二九五ページ)。

(9) 『わが日わが道・後篇』九六ページ。

五

これまで、しばしば斎藤茂の文を引用してきたが、かれは一八八七(明治二〇)年南安曇郡烏川村に生れ、小学校卒業後日露戦争直前から戦後の時期の研成義塾に学んだ。二年間の兵役を勤めたばかりは、ほとんど在村して農業に従事した。かたわら、一九〇六年以来『長野新聞』『信濃民報』『信濃日報』『信濃毎日新聞』『読売新聞』『日本評論』『日本及日本人』などに、主として時事評論を寄稿し、『文庫』『創作』『新声』などに随想を寄せ、また、『信濃教育』には三〇篇ちかい

論評を載せている。とりわけ、一九二〇（大正九）年二月には個人雑誌『山上』を創刊し、翌年二月廃刊まで一〇号を出している。三〇ページ前後の小冊子だが、政治、社会や教育、文化についていまにも通用する炯眼をもちつづけた。たんとした姿勢をもちながら、しかし、「愚者が愚者なりの哲学を発見すること、これを身につけること、そしてそれを確立すること、これが愚者なるわたしどもの仕事¹⁾」であることを、この小雑誌を通して訴える自負にささえられてもいた。そして、杉浦重剛、犬養毅、片山哲、阿部次郎、桐生悠々、石原謙、島木赤彦、天野貞祐らとも文通していた。

斎藤は井口の門から渡米したグループ、というより『天籟』のグループに属したが、渡米の機会をえず、また、宗教的には在塾時代からすすんでいなかったとみられる。けれども、研成義塾の産んだもつとも良質のひとりであったにちがいない。²⁾ 文筆に親しみながら、その農園には雑草の一茎だに見出さないう。かれも、井口が「よい人になれ」と訓えたことを大切にして生きた人だろう。

- (1) 『山上』一九二一年一月二日編集後記。『山上』誌上の評論にかぎって主なものをおく。民主政治の専制化、行き詰まれる政党、民衆の指導者、世界改造を頼むは原敬君、選挙界の現状打破、軍隊精神の時代化、小学教育に対する新しき試み、国民を過る中等教育、庶民大学を興すの急、帝国主義と国民文化及び教育、国民思想の嚮導について床次内相に与う、教化の機関としての新聞紙、智識階級とは何ぞや、信仰を基礎とせざる旧文芸の破産、俗悪なる婦人雑誌の横行、『農民美術』の墮落、松本市の文化的頹廢、独乙国民の将来、露西亞を見る、組織家としてのナポレオンとビスマルク、時代の子としてのルーテル。

- (2) 中田信蔵は『山上』を読んで、斎藤氏を塾のうんだ成果とし、井口を継ぐものと期待した（一九二〇年八月二四日井口宛書簡、『井口喜源治』一五一ページ）。

一九二二（大正一一）年の統計によると、南安曇郡出身の北米在留者一一九名中、穂高町のものが七九名をしめている（穂高五七、西穂高二、北穂高一二、南穂高三、有明五）。旧穂高町は北米五七名に中国、ヒリッピン在留者を加えると七三名であり、二位の梓村の二四名と大きな差がある。『南安曇郡誌』には「これ研成義塾関係者中に先覺の士ありて先鞭をつけ、爾來後進を誘掖したるによるものなり」とある。

事実、右の数字の過半が井口の門を経たものたちであった。のちには、逆に目的を渡米において研成義塾を志望するものもあった。移住の時期は、日露戦争直後の一九〇六（明治三九）年、一九〇七年に集中している。それまで北米への長野県からの移民は毎年数名であったが、両年度にはそれぞれ六七七名、六六八名と急増して、以後はふたたび下降している。西沢太一郎はこの急増の原因を、諏訪高島小学校中心の海事思想教育および井口喜源治の研成義塾などの思想啓発にもとめてゐる。

両年の渡米熱は、島内兵太夫（日本力行舎）らの海外発展鼓吹の影響下にあることは事実だが、井口門下のブームの受けとめかたは、かなり独特である。當時を齋藤茂は次のように回想している。

「わたしがこの水溜のあたりを独りで自由にさまよひ『愛吟』や『天地有情』を声高に放吟して憚からぬ年頃になったのは、それから三、四年してから、耶蘇の学校の教育を受けた後で、時は日露戦争の勃発する直前、主戦論と非戦論が国論を真ツ二つに割った激動期、まさに日本のスツルム・ウインド・ドラング時代、わたしは受けた教育の思想的傾向から、自分の精神は非常な感激と勇氣に燃焼して、悲壯なほどの献身的宗教心に充たされた。そのため二、三の同志と謀り、世俗に対する挑戦として雑誌『天籟』を発行した。初心ながらルーテルの意気に倣ひ、その反逆盟約を結んだのは、外ならぬこの水溜のほとりの草場であった。

……此処にわれらが常に教へを蒙る先生の導びきにより、わが同人がその他の友人先輩と合せて十人、二十歳未満の連中

が時勢に魁けてかのラウンド・ヘッドのピ、ユ、リ、タ、ン、精神を移して、精神的、魔、類、の、彼、の、地、同、胞、の、間、に、神、の、国、を、建、て、る、といふ大望（野心）を抱き、出稼移民の卑しい名の下にも大挙北米の加州に渡ることとなり……」（傍点宮沢）と。

「理想の聖国」の建設が、少年期をおわろうとしていた彼らの心をとらえていた。だから、事實は労働を目的とした単純な移民であつたとしても、清教徒の心情にささえられていた。『天籟』は、ルカによる福音書一二章および詩篇八四章を用いて、渡米即一攫千金、そして錦を故国に誇らうとするのを厳しく戒めている。それらは井口の対社会への姿勢の反映であつたといえよう。

渡米する青年のために、井口は塾生や後援者（ほとんどは禁酒会につらなる）を集めて壮行会をひらいた。かれは、「厳然たる態度で、言々句々火を吐く如く、先生の平常のお優しさで何処からあんな熱烈な声調が送り出るか、そのお眼は輝き、面は赤く熱し、天魔といへども近寄り得ざる威容、げに神の人とはかゝる人であつたか」と思われる厳しきをもって、「いづこ如何なる所へ行くも神と俱に歩むにあらざれば、千万の富を得るとも何の益かあらん」と戒め、「常に神を畏れて、人を怖れず、正義のために堂々と闘」うことを諭した。

さらに、駅頭でも、「停車場に到れば豈計らんや、我が井口先生は態々、義塾生徒の一隊を率いて、私を見送って下さつたのである。一齐に平林君万歳を高唱して、恰も出征軍人を戦場に見送る光景を呈した。私は憮然として之に答ふるの辞を知らなかつた。想えば私は名もなき憐むべき一個の移民に過ぎないのに、何たる温い真情の流露なるぞ。子弟を遇するに斯くの如し」と感動させた。

出立にあたって東京では、彼らの多くが内村鑑三、山室軍平、島貫兵太夫らを訪問して信仰を確認したり励まされたりしている。井口は渡航手続だけでなく、こうした機会をつくることまでも配慮していた。「理想の聖国」は、青年たちだけのものではなく、井口自身がその実験にかけていたのではないだろうか。

渡航には、三等船賃六〇円、衣服など洋式化を含む雑費九〇円および当座の生活費保証のためのいわゆる「見せ金」五〇ドルなどの合計約二五〇円が、最低必要だった。当時一升の米の値段は一三〜一四銭くらいだったというから、これだけの渡航費の拮出には決断を要した。清沢冽は結婚の祝儀のつもりで用立ててくれるようにと苦肉の策をもってし、両親は「一人の子供を亡くしたつもり」で同意したという。東条麟は、資金を母が先に立って借り集めてくれたことを、後年感謝をもって記している。

- (1) 『南安曇郡誌』一九二三年、同郡教育会刊、五七三ページ。一九三五年には、同郡出身の北米在留者数は二一六名で、県下では小県郡（三五二名）、上伊那郡（二八八名）に次ぐ（永田綱編『信濃海外移住史』一九五二年、信濃海外協会の刊、三七ページ）。
- (2) 西沢太一郎「信州教育と海外発展」（『信濃教育』一九四二年二月号）。
- (3) 平林利治「井口先生を憶ふ」（『井口喜源治』一八二ページ）、東条麟『私の春秋』一八ページ。
- (4) 斎藤茂「くぬぎ林」（『山上』一九二〇年三月、『わが日わが道・拾遺篇』一九六八年、山上社刊に所収、二四九〜二五〇ページ）。
- (5) たとえば、如石生「渡米せんとする友に」（『天籟』第四号、一九〇六年一月五日）。
- (6) 望月秀一「義塾魂」（『井口喜源治』一九ページ）。
- (7) 平林利治「井口先生を憶ふ」一八四ページ。
- (8) 東条麟『私の春秋』一九ページ。
- (9) 一九六七年一月五日、清沢市治氏談。

七

在米の研成義塾出身の有志が中心となって、シアトル穂高倶楽部を設立したのは一九一三（大正二）年一月六日である。当

初の会員は、青柳菊弥、伊藤博一、伊藤豊作、伊藤恒司、片瀬与一、勝野庄市郎、清沢冽、清沢森、清沢己未衛、須坂美寿、高橋実、東条禰、西沢永一、平林破魔雄、平林俊吾、平林利治、平林基宣、三沢多門次、望月五六、望月滋司、望月積善、望月秀市、横沢勝市、横山重義、横山信之の二五名である。三月には、ここから『新故郷』第一巻第一号を刊行している。一九〇六年の渡航組にとっては、在米七年目であった。

一九〇七年に渡米した平林利治と片瀬与一は、はじめ寄宿の便宜からシアトル市の山手の医師の二階に下宿したが、ここに同郷の青年たちが出入りし、おのずからそこが彼らの親睦の場となり、彼らはここを「穂高苦楽部」と呼んだ。いわばこうした自然発生的なグループが、やがてこの借家を中心にしてシアトル穂高倶楽部を設立するのである。これにキリスト教的な相互扶助、精神修養と向上などの性格を与えたのは、故国にあった井口喜源治と研成義塾同窓や禁酒会員らとの関係を無視できない。設立時の会員二五名中、一二名が研成義塾出身とみられる。また、伊藤豊作（のちに帰国後北穂高村長）は出身ではないが井口とは血縁のクリスチャン（シアトル美以教会員）であったし、清沢己未衛は木曾山林学校の出身だが弟の森が塾出身だし東条禰と親友でもあったなど、過半のものが研成義塾につながっており、禁酒会にまで範囲を広げるとさらに増える。

渡米後の彼らの生活状態を知ること、それは移民一般を知ることだが、この倶楽部の性格をつかむ手がかりになるだろう。

東条禰の、一九〇六年六月渡米から一九一三年一月倶楽部設立時までの職歴を追ってみると、米人経営の製材所（レッドモンド）―米人の農場（チェリー・ヴァレー）―友人と苺の栽培・養豚（ベーション・アイランド）―日給制労働者（シアトル製材所―鉄道）―砂糖大根収穫（アイダホ州）―銅山鉄道（ユタ州）―日系農場手伝（サクラメント）―グロセリー（シアトル、清沢己未衛と共同経営）とめまぐるしい。以後も二回転職し、結局グロセリー経営に落着く。そして、一九一五年、渡米九年目二七歳で独立開業にこ

ぎづけた。本来、農業で身をたてることをめざしていた東条にとって、すべての苦難はそのための資金蓄積のための耐乏であつた。⁽¹⁾しかるに、カリフォルニア農業の投機的性格のもとら悲慘を体験したかれは、「自分のように物堅く育った者には不向きな職業だったのだ」と気付く。⁽²⁾商業への転換は、挫折というより、かれなりの自己の回復であつたとみられる。

三沢多門次の場合も、倶楽部に寄宿するまでに、洋食店、肥料会社、ボーイ、製材会社、鉄道、農産物会社、樵、借地農業、薬化粧品店小使と転職し、そのうちも遠洋捕鯨船員、建設業助手などを体験している。⁽³⁾他の会員の職業も、以上の他にクリーニング、洋服店、雑貨店、時計店、ホテル、仲買人、温室業、農場などの経営や勤務を交叉させて、すべて働く者たちであつた。新聞記者（清沢冽）、画学生（西沢永二）は例外的である。

すでに排日のうごめいている未知の天地で、ほとんど無一物の独身青年たちが、生活をうちたてる苦難は充分うかがえる。これは当時の平均的な移民の姿であろう。⁽⁴⁾初期の子女を伴わない成年男子だけの社会では、反面、「肉体労働のあとは、ばくち、酒、女におぼれるものがあつたのも、血気の盛んな連中にすれば無理もない」面もあつただろう。⁽⁴⁾目的を喪失したその日ぐらしの、奈落に沈む移民がいつそう日米のひんしゆくをかつた。

こうした背景のもとで、同郷の者が同居して親睦した例は、穂高出身者に限られるわけではない。⁽⁵⁾けれども、「理想の聖国」を共通の理念とした交りは特異なものであつた。

シアトル穂高倶楽部およびその機関誌『新故郷』の発足は、前述の自然発生的な親睦グループを母胎とし、郷里の『故山新報』に触発されたものとみている。⁽⁶⁾『故山新報』（故山新報社、非売品）は臼居佐登美、西沢今朝勝、西沢本衛、西沢静雄、望月弥生、原田幸自由ら教友が交代で編集にあたつて、不定期に出された小冊子だが、研成義塾と禁酒会の外郭の、いわば同窓会誌的な性格のものである。故山ニュースおよび個人消息は、主としてこのことと、この範囲の教友を対象にして採録している。日米を連繫するのは、研成義塾・井口にはかならない。⁽⁷⁾平林利治は「余にして我が神を棄てざる限り余輩の交友は

決して渝⁸ることなく、祈禱が太平洋をへだてて両者を結んでいることを信じた。信仰こそはこの友情をうんだと確信することによって、神は彼らのあいだでゆるぎないものとなつたし、同時に困難な現実を、「互に手を取りて此世に信仰の善き戦を闘ひ、走す可き趨^{はせほ}場を進」むとせさせたのである。⁸この姿勢は会員に共通する。厳しい排日のさなかで、彼らが到達した思想は、偏狭な忠君愛国ではもとよりなく、ピューリタニズムを背骨とする新故郷の建設であつた。「今や我等は日本国の忠良なる民たるに留まってはならない、更に進んで世界到る所の国に於て善良なる国民たり、市民たり得るでなければ、日本は世界的大国民たるは到底不可能で有る、我等は世界の一市民を以て任じ、国の為め全世界のために貢献する覚悟でほしい」という主張の原理は、当時の日本政府当局や識者のもつ原理とは異なる。「新故郷」各号の巻頭におかれた平林の論文は、この問題に関する内村鑑三の排米的対応をはるかに越えるすぐれた思想家のものである。彼らの信仰の種は井口によって蒔かれ、育てられた。井口は故国にあって、教友一人ひとりに通信して祈ることを教えた。

平林俊吾は次のように記している。「信仰的孤独において荒涼たる野原に立てるが如く感じ、やゝもすれば私の心は荒んだ。私は己に信仰の無くなるのすら感じた。この時折もよく井口先生は長文の手紙を寄せて、懊惱と寂寥とに沈める私の心を慰めてくれた。実に我が心は百万の援兵を受けた思がしたのであつた。……私の心霊はいく度か信と不信との境界を彷徨した。しかもこの信仰の危機にあたつて、とも角も、自分が支えられて来たのは、見えざる御手は別として、一に井口先生その人の力によってであつた。誠に井口先生の全身に湛ふる靈水を受けて辛うじて不信者の群に墮つるを免がれた」と。¹⁰また、信仰を全うしなかったものにも、「私は目に見えない神様に対してよりもこの現実の先生の教えに反いてはならぬと常に反省の生活を送りました」ともいわせている。

倶楽部の会則は、すでに右のような核をもつ以上、ただ穂高地方出身者の友誼と親善をうたったごく簡単なものでよかつ

た。ここでも全四カ条中にキリスト教の文字を見出さなければ、井口との個別の関係を集団化した無教會的の信者なしは求道者を中心とした団体であったといえる。

倶楽部には一〇名前後のものが、前記の医師宅の五部屋に寄宿し、ここが「幾多世の誘惑より免」れ、「弱き乍らも世の風波と勇敢に戦」う「避所、蔭の家」としていた。異境でさすらい、皆さんだ者も倶楽部にたどりつくことですくわれている。いわば教会が果したであろうことと同様な性格をもっていたといえる。

同年八月から、倶楽部内で聖書研究会が開かれている。おくれて倶楽部に寄留した吉野信寿は、故国の教友にあてて、「同クラブ員は恰ど信州穂高の出身無教會主義の信者多く御座候牧師なけれど日曜日毎に集会を持ち候祈り讚美感話等却て教会に見受けざる程熱心に真面目に御座候されば名はクラブと謂へ実は真面目な青年の団体キリスト教的人士として一般に承認せられ候着米以来クラブの一員たるを誇りとし感謝致し居り候」と書き送った。⁽¹²⁾

ここで、教会との関係について一瞥しておく。倶楽部員中には熱心な教会員も多い。西沢永一の追悼会は、シアトル美以教会で倶楽部員が参会して開き、大林宗嗣牧師の祝禱をうけているし、清沢己未衛追悼会にも同牧師をわずらわせている。また、多くの倶楽部員が結婚式はかれに司会してもらっている。東条はシアトル浸礼教会で岡崎福松牧師の司会で結婚し、ポートランドでも教会を援助した。その他、教会とは決して無関係ではない。とりわけ美以教会との近隣的關係を認めざるをえない。しかし、主流は井口喜源治流の無教會主義を自負している。倶楽部としては、教会とのあいだにむしろ一線をひいていたとみられる。もちろん、教会と対立することが目的ではなかったとしても、⁽¹³⁾「教会の別天地に棲息し独り天国の門に入る鍵を手握ると傲語するもの」を批判し、⁽¹⁴⁾「人の子がパンを求めんに石を与へ」るがごとき「移住地に於ける宗教家の猛省を促」すという姿勢は、二、三の倶楽部員にとどまらない。牧者が羊をスポイルしない独立独歩こそ彼らにふさわしい。それが若い日に井口から学んだものであった。

この他、拠金により蔵書を整えて倶楽部員読書会、会員による演説会を開いたり、『倶楽部日報』を発行して感想を授けたり、筆戦を展開したりしている。研成義塾出身者は月一回の例会をもったが、これを研成会と呼んだ。また、降誕祭、新年会などの他、ポンテアックに入植した倶楽部員が中心となって、この白人と共催の穂高倶楽部運動会が恒例化している。一九一四年春季の記念写真には一一四名（成年男子六二、同女子三〇、児童二三、幼児九）、クラブ雑報には一三〇余名、高橋領事夫妻、太田書記生夫妻他も出席、と記録されている。

これらの諸活動を通して、『新故郷』各号に紹介されているように、新入倶楽部員を迎えている。帰国する者があっても、一九一五年前後に急増した結婚（新婦はほとんど郷里から迎えているし、研成義塾出身の女性も多い）、出生などによってその実数は漸増している。

第 四 表

『新故郷』発刊
年月と入会者数

1号	1913. 3	25
2号	1913. 7	11
3号	1914. 1	4
4号	1914. 8	2
5号	1917. 3	11
合 計		53

これにともなって、倶楽部は変容している。その一は、『新故郷』第三号以後に紹介されている新入会員一七名はすべて穂高町以外の出身であり、南安曇郡出身者は一名にすぎない。また、第五号での一一名中、六名は県立中学校、他の二名はそれぞれ千葉医専、慶応理財科の出身者である。職業には、銀行員、保険業、新聞社員、支配人などが目立つ。古い会員の帰国するものもあって、井口を直接知らない者が比重を増す。一九一五年六月二七日の総会で、「穂高の名の地方的なるに對し広義なる意味の瑞穂をもって代え」、瑞穂倶楽部と改称したのは、右の変化に対応したものであった。それとともに、

四カ条の簡単な会則にかえて、七章一九条に整備された会則をつくっている。

第二の変化は、倶楽部創立の中心となった者たちが家庭をもって、次つぎに自立していくことである。たとえば、平林利治、平林俊吾、平林基宜、望月秀一は共同で農場経営にあたるためにポンテアック村に転出し（一九一四年二月）、倶楽部寄宿舍管理を平林破魔雄、伊藤恒司らに譲っている。さらに、平林基宜夫妻はレントン近郊に土地を買収して独立した。これよりさらに、ポンテアックに入植して伊藤農園で協働していた伊藤豊作夫妻、勝野庄一郎夫妻、横山信之らも順次独立した。かつて「独身倶楽部の別名を有したりし倶楽部員も」結婚あるいは独立的事業を起こすことによって拡散していることである。同時に、当地で刊行された『在米人物観』『在米人物総覧』などに採録される倶楽部員の名も見出される。また、一九二二（大正一一）年一月創立の信濃海外協会（總裁・千葉了）の米国西北部支部（シアトル市・会員二〇〇名）の役員に、伊藤豊作、望月五六、小池代治郎、横山重義、平林破魔雄、平林基宜、片瀬与一らが、北加支部（サンフランシスコ市・会員九〇余名）役員に望月滋司の倶楽部員の名が散見されるようになった。

こうして、熱っぽい青年の息吹は失われていくが、より確実に定着していくのを見ることが出来るだろう。

- (1) この苦難を支えた多くの支柱のなかで、井口と義塾のグループおよび『実業之日本』の教訓はぬくことはできない（東条鱗『私の春秋』一六一七、一二八一―一二九ページ）。

- (2) 同書、四四ページ。

- (3) 三沢多門次「夢の八年」（『新故郷』第二号、一九一三年七月）。

- (4) たとえば、森田幸夫「在米日本人移民の一断面——その特性と人種偏見——」（『地理月報』一四〇号、一四一号、一九六九年七月号、九月号）参照。

- (5) 福岡県出身の三苦氏は、「同郷の独身の若者達が、金を出し合って一軒の家を買い、独身寮のようにしていました。……この独身寮の人達も、

やはり私同様、金の一、〇〇〇ドルか二、〇〇〇ドルもたまったら、故郷に錦を飾る肚の組でありました。……私が日曜の午後たずねてゆきま
すと、……テーブルの上には、一週間稼いで得た一二枚のドル銀貨を積み重ね、じみじみと眺めて悦に入っていました」と、のべている（同論
文より引用）。

(6) 「余輩が本誌発行は必ずしも愛の自動的發露ではない。余輩郷土友人に『故山新報』の名を以て態々我々を慰問せんとて数年之を継続發行して
居るものがある。頃日其第十三号は余輩を見舞はれた。是れに對しては余輩の『新故郷』は他動的である」。一九一三年三月一日、發刊の辭。

(7) 「……研成塾は私共の生まれた処に候同塾の爲めには吾等遠近相応呼してとこまでも尽し度候近くある自分等の何のなすなきを諸兄等に対し恥
じ入り候」（『故山新報』第二号、一九一二年一月二〇日）。

(8) 平林利治「故山の教友を憶ふ」（『新故郷』第一号）。

(9) 同、「吾人の覚悟」（同、第二号）。これに對して、排日の終決算として第二次大戰下のアメリカがいかなる仕うちをもつてしたかは、石垣綾子
が指摘している（「回想のスメドレー」、『みすず』八八号）が、この点については別に触れない。

(10) 平林俊吾「靈魂の生みの親」（『井口喜源治』一八七ページ）。なお、平林利治はこのことに關連して、「殊に余輩が不審に堪へぬ一事は、日
本では立派な基督信者と人も自分も許した人達が、此の國に来て間もなく敝履を捨てる様に信仰を抛つ事である」（「在米同胞の将来」、

『新故郷』第四号）と指摘している。

(11) 東条麟「常識の修養」（『井口喜源治』一六四ページ）。

(12) 吉野信寿「新故郷より教友へ」（『新故郷』第四号）。

(13) 大町教会の基礎をおいた南部小三郎の息氏は、井口から「私は神様に導かれて無教会の中に信仰を持ったのであるが、教会によつて信仰に入
った人はそのまま教会とあつて信仰に進むべきである」と励まされている（南部信「礼拝を重んずる」、『井口喜源治』二一八ページ）。手塚
縫蔵は日基の松本教会を和田正牧師にゆだねるまで育てた教会人にちがいがなかったが、かれと矢内原忠雄との交友は周知の通りである。両者の
個性にもよるだろうが、地方では、キリスト的なものがセクト化せず、未分化で共同しえたのではないか。井口没後、横内氏らは、手塚が「牧
師ではないからよからう」という理由でかれを穂高にまねき、井口、手塚両門下のものがキリスト教の礼拝をまもり続けた。

(14) 平林俊吾「年頭雜感」(『新故郷』第三号)。

(15) 平林利治「在米同胞の将来」。

(16) 一九一五、一九一六年、日米評論社刊。西北部における「成功家或は將に成功せんとする道程にある重なる在留日本人」を採録したとある。

(17) 永田稠、前掲書、六三ページ。

八

以上研成義塾の沿革を通して、井口喜源治につらなる人びとについてとりあげてきた。しかし、本稿では相馬愛蔵、黒光夫妻、その長女でラス・ビハリ・ボースと結婚した俊子、清沢冽、久保田栄吉について、あるいは周知の井口と礪山との関係などについてはのべなかった。名のある人びとについて論述するのが主意ではなかったからである。

また、井口のもつ積極的な面をおもくみすぎたかも知れない。しかし、ここに登場する、いわば名もない神の民の生き方の核には、井口という強烈な個性をもった一人のキリスト教徒がいたことを指摘しておきたいのである。

研成義塾はすでに存在せず、また穂高倶楽部は拡散して第三世の時代に入ろうとしている。けれども、ひとつの信仰が井口につらなる教友の一人ひとりの体質のなかに定着して、たのしい群像をうんでいるのを見ることができ。こうして、キリスト教の、むしろ退潮期としてとらえられる明治後半から大正期の地方農村におけるキリスト教受容の一例を掘りおこして素描してみたとどまる。

(本稿の作成にあたって、伊藤くにゑ氏、大島允氏、勝野義権氏、清沢市治氏、斎藤茂氏、須沢績氏、東条麟氏、横内三直氏の各氏から、多くのご教示や資料の閲読をさせていただいたことを記して感謝の意を表しておきたい。)